

教育こども委員会行政調査報告

教育こども委員会委員長 徳山 敏子

1. 日程

令和7年11月12日（水）～13日（木）

2. 調査項目

- （1）バーチャルユースセンターについて（埼玉県）
- （2）子ども家庭総合センター あいぱれっとについて（さいたま市）
- （3）グローバル・スタディについて（さいたま市）
- （4）子ども夢パーク・フリースペースえんについて（川崎市）

3. 委員長所見

（1）バーチャルユースセンターについて（埼玉県）

埼玉県では、子どもの居場所づくりを学童期・思春期のみならず、大学生や20代の若者も含め取り組んでおり、子どもがおとなとして円滑な社会生活を送ることができるようになるまでの成長の過程を、年齢によってサポートが途切れないう指針を定め取り組まれている。また、なんとなく誰かとつながりたいけど、対面ではつながるのが苦手という子ども・若者が交流できるようアバターを通して交流や相談ができプライバシーも保護されており安心して相談等につながるのではと感じました。

ただし、事前登録をなくし誰でも入れるため、なりすましによるトラブルには注意しないといけなことが課題だがなりすましの見極めはむずかしく、今後安全な対策が必要としている。



（2）子ども家庭総合センター あいぱれっとについて（さいたま市）

老朽化によって使用中止となった旧・中学校跡地を活用し建設。子どもの問題の複雑化への対応、また、子育てに関する相談窓口がわかりにくい、相談ニーズが増加しているという子どもの問題の現状を、専門相談機関をあいぱれっとに1か所に集積し連携する体制を整え、子どもと家庭の新しいセーフティーネットとして、全ての子ども・家庭への支援や予防、早期

解決に取り組む複合施設として整備されている。

たとえば乳幼児期から保護者とともに施設を利用した経験のある子どもは、何か困ったことが生じたとき、同施設の雰囲気にも慣れているため助言や相談支援にもつながりやすいのではと感じました。また、対象年齢に関係なく利用でき「つながりカフェ」や天気に左右されることのない屋根つき運動場、バンドスタジオやダンススタジオなど無料で開放し、お小遣いを気にせず利用可能であるため若者にとって魅力的で放課後や休日等、活用しやすいのでご利用者はやはり近隣の方になってしまうのではとの懸念もぬぐえない。神戸市においては兵庫区のこども家庭センターを備えた施設を中心に各区に乳幼児から遊べる子どもの広場が作られているが、同施設での相談体制までは整っていない。



（３）グローバル・スタディについて（さいたま市）

全ての市立小・中学校で、小１～中３までを一貫した教科として行う独自の英語教育を実施されている。グローバル・スタディの特徴として、様々な小・中学校の教員等からなる作業部会を設置し、扱いづらい点や旨くいった点等を教育委員会に報告してその報告を基に教育委員会が常にカリキュラムをブラッシュアップし、「質」の充実に努めておられる。また、ALTの採用にあつては教育委員会が直接面接、採用。教育委員会の力の入れようが素晴らしい。ALTの応募はいつも多く、倍率も高い。口コミで広がっているのも強み。以前よりわか会派では英語教育における小・中一貫校のモデル校の実施を訴えていますが、さいたま市ではすでに10年の実績を積み上げている。国際都市をうたう神戸市ももっと力を入れるべきと感じた。



（４）子ども夢パーク・フリースペースえんについて（川崎市）

川崎市の郊外の1,000㎡の工場跡地に子どもの居場所を開設。特に不登校児童・生徒の居場所や生活保護世帯やひとり親世帯などの子どもたちを中心に、高校進学等をめざして大学

生等と一緒に無料学習会も提供。若いスタッフが多く携わっておられ、不登校児童・生徒と年齢も近いので、不安を抱えて通っている子どもたちにとって、友達感覚で居られ肩ひじ張ることのない居場所になっているように感じた。

また、うつや精神疾患を抱えた子どもも来られるとのことでしたが、その子に応じてその子らしくいられる場所をつくっている。

また、特徴的だったのは、そのように病気を抱えた子どもも中にはいるにもかかわらず、スタッフについて西野理事長は、特に資格は求めている。生きているだけでいいという NPO の姿勢に共感してくれる人で、各文と面接のみで採用を行っている。資格要件はないが、実際は教員や精神保健福祉士など、様々な専門資格を持つスタッフに恵まれていると伺った。不登校児童・生徒について、親は子どもに学校に行ってほしいと思っているが、無理やり連れていくと精神疾患を発症する子や不登校になってしまう。ストレスを溜めて追い詰めてしまうと精神疾患を発症してしまう恐れもある。多くの親は、なぜこんな子になったのか、育て方が間違ったのかもしれないと嘆くが、不登校になってしまった児童・生徒に必要なことはまず親の支援と、子どもが安心して過ごせる居場所が大切であるということが伝わってきました。

神戸市においても「保健室になら通える子」から一歩進んで、全学校内に校内サポートルームができ、さらに「未来ポート」ができ、本来自分が通う学校ではないけれど、そこで集団で学習できる施設ができましたが、まだ市内に 1 か所しかないので、視察させていただいた川崎市の「たまりば」のようなのびのび自然体験ができる施設と人材が必要であると感じました。



最後に、今は学校へ行けなくても、バーチャル空間を活用してコミュニケーション力を養ったり、学校とは別な場所、時間によって自己肯定感が生まれ、社会に溶け込めるように見守ってそれぞれの特性に応じて伴走支援に取り組んでおられる視察を受け入れていただいた教育委員会の方々や、NPO 法人の皆様には心から感謝申し上げます。また、教育こども委員会のみなさまの活発な質疑と 2 名の市会事務局の方々のお陰で、視察が実りあるものとなりましたことにも感謝申し上げます。